

A G 5 ダラス補習授業校教員研修報告書

期間：2018年1月21日－25日

はじめに

「AG5ダラス補習授業校教員日本研修」の機会を今回のプロジェクトの一環としていただいた。都心では何十年ぶりかという零下を連日下回るといふ大寒波と二十センチメートルを越す大雪に歓迎された日本研修のスタートであったが、関係皆様のおかげで全ての予定を無事に終えることができた。ただただ感謝するばかりである。

本校としては、この機会を次のような4点を中心に研修を行い、ダラス補習授業校における各授業での言語活動を向上させるとともに、児童生徒の自発的な学びや学習内容への興味・関心の向上などに結びつける本研究をさらに推進させたいと考えた。

- ① 各種（小学校・中学校・高等学校・大学）先進校における具体的な言語活動の授業をしっかりと見学する。
- ② 日本語習熟度に差がある児童生徒の学習指導に対する効果的な指導方法及び教材開発について学ぶ。
- ③ アクティブラーニングの視点から言語活動の実際を学ぶことで、今後のカリキュラム開発に活かす。
- ④ 日本における実際の教育現場を視察することで、補習授業校において有効的に活用できる指導方法を見いだす。

詳細な報告や結果については後の各報告書に譲るとして、総括的にいうと「想定以上の成果」を収めることができた、と言える。また、授業見学や指導方法の会得だけでなく首都大学東京においては、実際に補習授業校等を卒業した学生との懇談会があり、帰国生としてあるいは世界に目を向けている若者の「生の声」を聞くことができ、参加者全員がおおいに刺激を受けた。

さらにはご一緒したパラグアイのアスンシオンで日本語教育に携わっていらっしゃる3名の先生方と同伴できたことも、国や土地が違えども思いを同じくする「同志」がいることに勇気づけられた。

今後はこれらの成果をダラス補習授業校へ還元するだけでなく、現在進行中のAG5ダラス補習授業校の連携校への発信、さらには今回築いたヒューマンネットワークを今後のダラス補習授業校改革へとつなげることはできないかと夢は広がるばかりである。

（文責：村上 洋司）

AG5 2018年1月21日-25日 ダラス補習授業校教員研修全日程

<日程の概要>

21日(日)(第1日)

9:15 DFW Dターミナル 日本航空カウンター前に集合

11:10 DFW 発 JL 011

22日(月)(第2日)

15:00 成田空港着

16:15 リムジンバス→ホテル(サンルートプラザ新宿)へ 18:30

19:30 情報交換会

23日(火)(第3日)

8:16 ◆新宿(JR山手線) 8:32 池袋(西武池袋線) 大泉学園

9:00 西武池袋線 大泉学園駅改札口集合

10:00-12:50 東京学芸大学附属中等教育学校訪問

13:30-15:00 東京学芸大学附属大泉小学校訪問

24日(水)(第4日)

8:00 ◆新宿(JR中央線) 立川

9:00 立川駅北口バス10番乗り場(拝島営業所方面)集合

◆立川駅北口9:12(立川バス)9:40 啓明学園

10:00-12:00 啓明学園初等学校・中学校高等学校訪問

◆啓明学園(スクールバス) 拝島駅

◆拝島 12:31(JR八高線) 12:42 八王子 12:50(JR横浜線) 13:02 橋本 13:14
(京王相模原線) 13:18 南大沢

13:30-16:00 首都大学東京南大沢キャンパス訪問

◆橋本(京王線) 新宿

25日(木)(第5日:最終日)

8:30 ◆ホテル(タクシー) 市川学園

9:45 市川学園エントランス前集合

10:00-12:00 市川学園訪問

◆市川学園(タクシー) 成田空港

16:00 アメリカン航空カウンター前集合

20:10 成田空港発(JL7012便 ダラス着は同日の15:40)

<宿泊先>

サンルートプラザ新宿(1月22日~25日の3泊4日)

〒151-0053 東京都渋谷区代々木2丁目3-1

AG5 ダラス補習授業校 日本研修参加者名簿

No.	担当学級等	氏 名	主 担 当
1	小2-2	長本玲子	市川学園
2	小3-1	上笹貫陽子	東京学芸大附属大泉小学校
3	小3-3	木下美香	啓明学園
4	国際Ⅳ	石原意子	首都大学東京
5	中1-1	吉岡理穂	東京学芸大附属国際中等教育学校
6	中3-1	佐藤恵美	副団長及び渉外・会計
7	高校(副)	五味 愛	各種映像記録
8	校 長	村上洋司	団 長

1 日 時 平成 30 年 1 月 23 日 火曜日 10 時 00 分～12 時 50 分

2 訪問先 **東京学芸大学附属 国際中等教育学校**

(住所：東京都練馬区東大泉 5-2 2-1)

3 研修内容の概要

(1) 学校説明 藤野智子副校長先生

①学校像

多様で異なる人々と、共生・共存でき、進展する内外の国際化の中で、活躍する力を持った生徒を育てる学校

②教育の特色

・「国際教養」：グローバルスタンダードの教育である国際バカロレア（IB）の中等教育プログラム（MYP）の考えのもとに、国際理解・人間理解・数理探求という 3 つの柱で構成される 6 年一貫教育の中で実施するカリキュラム。学習指導要領で定められている「総合的な学習の時間」「学級活動」及び「道徳」に相当する。

・「問題解決学習」：すべての教科・科目において IB の趣旨に基づいた学習を実施。特に、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）では課題発見力、問題解決力、論理的思考力などの伸長、スーパーグローバルハイスクール（SGH）では、国際社会で活躍する人材に必要な組織力、対話力、実行力等の育成を進めている。

・少人数・習熟度別の英語教育

・海外教育体験生徒へのケア：JSL など。

③日本国内の IB 教育のリーダー校：IB 教員養成課程として大学生の教育実習を受け入れ。

(2) 授業参観 4 校時

①中学部 3 年 約 100 名

・パーソナルプロジェクト プロポーザルの説明（IB に提出）

・中高 6 年間を通して一つのプロジェクトを実施。その 3 年目。

②DP 6 年（高校 3 年）数学（代数）

・神奈川大学の学生による英語での授業

③高校 2 年 国語（全 5 時間の中の 3 時間目）

・「こころ」を教材に、「探究的な課題」を各生徒が設定し、仮説のもとに検証をグループワーク（4 人）で行う。

・「探究的な課題」とは、はい、いいえでの答えではなく、考えを深められる問い（生徒談）

④高校 2 年 社会（世界史）

・ニュース報道のような形式で、世界史のトピックをグループで発表（4 人）

- ・スマートフォンを見ながらの発表。
- ・教員は、キーワードをピックアップしていた。

⑤中学2年 英語 雨宮先生 生徒16名

- ・英語による授業。一つのトピックに対して、読む、聞く、話す、の実践。

⑥中学1年 書き初め (生徒34名)

- ・4つから1つを選び作品を作る。

(3) 質疑応答

①国語科主任西村先生

Q.日本語力に差がある生徒がいるクラスへの授業の工夫は、具体例は。

A.難しい点である。授業はできる生徒に照準をあわせて、わからない生徒はできる生徒に聞くように促している。英語だとできるという生徒には、まず英語で取り組み日本語に訳すというのでも良い。

Q.読む力への指導はどのようにしているか。

A.本校でも同じ課題がある。音読をさせている。古文が暗唱しやすくして良い。

②DP2年担当

Q.評価はどのようにしているのか。

A.評価の5つの観点を、ルーブリックなどを使って行っている。IB基準は4つの観点になるので、そこへ落とし込んでいく。

4 全体所感

(1) グローバル化が進む中で、世界に通用する日本の将来を担う人材を育成することを目指して、それぞれの学校の特性を生かしながら取り組んでいる様子を知ることができた。

その中で、アクティブラーニング、ICT化など、新しい手法、ツールを採用する試み、試行錯誤している実際も知ることができた。日本の学校では最終的に大学入試やIB資格取得で良い実績を残さなければならず、入試制度と勉強形態のギャップも教育者にとっては悩ましい現実であることを実感した。

(2) 啓明学園での、帰国生に対する一人一人の能力にあった時間割や取り出し授業など、理想的である一方で、週1の補習校ではそのまま行うことはなかなか難しい。ただし、補習校の最終目標が大学入試や資格取得でないことから、アクティブラーニングを取り入れて、児童生徒が自ら考える授業を行っていきやすいと感じた。

(3) 授業の組み立て方としては、今回訪問させていただいたどの学校のどの先生も「まず生徒に考えさせる」「生徒の興味を引き出す」ということを異口同音におっしゃっていた。具体的な例で特に印象に残ったのは、学芸大学附属国際中学の西村先生の論語の授業で、ただ論語を読ませて意味を理解させるのではなく、ちょうど選挙の時期だったので「もし、孔子が選挙に

出たら」という視点で生徒に考えさせるという課題の出し方だった。最終的には選挙演説なども行ったということで、かなり論語の内容を詳しく理解していないとできない課題であるし、楽しく取り組むことができる。

つかみの問いかけは、先生同士で相談しあっているとのことだったので、補習校でも他の先生と協力しながら取り入れていきたい。

(4) これまで蓄積された知識や技能の伝承も課題の一つであることも感じた。

(文責：吉岡 理穂)

1 日時 平成30年1月23日 13時30分～15時00分

2 訪問先 東京学芸大学附属大泉小学校 (住所：東京都練馬区東大泉5丁目22-1)

3 研修内容の概要

(1) 学校説明 細井副校長先生

①大雪の緊急対応について (大雪による交通機関遅延により出席生徒数が在籍数の8割程度)

②国際学級について

(2) 授業参観

①国際学級5年ゆり組 指導者 佐藤先生

<算数>単元 「割合」 (導入)

- ・雪のため欠席者あり
- ・違う個数の玉が入っている3つの袋の中から、色のついた玉 (あたり玉) を引く可能性についてクラスで話し合っていた。(アクティブラーニング)
- ・生徒の発言に合わせ、分数や数直線を板書し、それぞれの袋に入っているあたり玉を引く“割合”を生徒に分かりやすく説明していた。(視覚化)

②国際学級4年ゆり組 (生徒数7名) 指導者 久保先生

<社会>単元 「水のゆくえ」

- ・雪のため欠席者有り
- ・子どもたちと水の使用量について話し合っていた。社会の授業だが、各家庭の水の使用量 (種類別) を合計する際、単位について算数の学習も含めて思い出すよう声かけをしていた。国語の「言葉」「漢字」の学習につながる機会があれば同様に声かけをするよう工夫していた。
- ・子どものふとした発言 (一聞すると授業とは関係無いように思える質問) の真意を一瞬で捉え、回答をされていて素晴らしかった。

(3) 質疑応答 細井副校長先生、国際学級ゆり組4年担任 久保先生

- ・ビデオで積み上げ学習、菊の子学習、心の学習といった大泉小学校独特の学習活動を知った。

・とりわけ興味のあるはげみ学習（個別授業）について質問をした。

→学年に関係なく、生徒自身で進められる内容のオリジナル教材を進度別に提供している（オリジナル教材のサンプル「国語」と「漢字」を頂いた）

4 所感

(1)授業中の態度

生徒たちは参観者に気を取られる様子もなく、皆集中して落ち着いた態度で自主的に授業に参加していて驚いた。

教員が生徒の興味をひく発問をしていたこと、生徒たちの自由な発想や表現、考え方をきちんと受け止めた上での応答、助言の仕方に、生徒が物怖じせず発言出来る環境作りがなされているのだと感じた。

(2)教員の指導方法

習熟度の違う生徒たちに教える教員の細やかな気遣い（わからないと思われる言葉はその都度、丁寧に生徒に確認をしている等）とおおらかな対応（今習ったからきっと次は分かるね、等）がとても印象的だった。私自身、受け持ちの生徒への声かけ時、「これは、先週授業でやったからもう出来るはずだ」等というクラスの進度に合わせた声かけをしていたこともあり、大変反省した。見学したクラスの生徒は帰国生ということもあり、どうしても日本語の語彙が少ない生徒がみられた。その場合はその生徒の第一言語で教えて、「それを日本語では〇〇と言うよ」と、指導していた。（例：ソルティは日本語でしょっぱいと言うよ。など）

生徒の母国語を否定しないこと、日本語が第二言語であり、それを学び習得しようとする生徒に対する理解が、生徒の自己肯定感を育てていると感じた。それは、簡単に「すごい」、「頭がいいね」、「よく出来るね」と褒めるよりも、生徒にとって意味のあることだと感じた。

(3)学校方針

体験できるカリキュラム作りを重視しており、非常に行事が多い。「経験から育てる」という学校方針が各先生によく浸透してした。見学した算数、社会どちらの授業も、教科書を見て授業をする事が主でなく、実際に生徒たちが「水の飲み比べる」「袋から玉を取り出す」と言う「ハズ・オン・アクティビティ」（＝活動）が見られた。実際に質疑応答の中で細井副校長先生より、カリキュラムマネジメントの際にメリハリをつけることを念頭においておられると伺った。「習得の時間」「考える時間」「探求の時間」という3つをバランスよく取り入れることでアクティブラーニングの形を授業で実現化していた。

(4)はげみ学習（個別学習）

木曜日以外の週4日間行われる25分枠のはげみ学習という時間は、個別学習に当てられる時間である。生徒たちが自身で取りかかれる教材を学校で用意していた。そのため一人の生徒に教員がつきっきりになったとしても、他の生徒が無為に時間をやり過ごすような事がない。

オリジナル教材は学年の単元をもとに作られたものではなく、日本語、漢字においては進度別、算数においては領域別に作成されたものである。(このサンプルは持ち帰っているので閲覧可能)

(文責：上笹貫 陽子)

1 日 時 平成30年1月24日 10時～12時10分

2 訪問先 啓明学園 (〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15)

3 研修内容の概要

(1) 学校説明 北原 理事長 兼 学園長

学園の歴史 創設者三井氏が帰国子女のために私邸を開放したことから始まる。

学園の理念 一人一人の持っているものを認め、そこから一人ひとりの能力を伸ばす。

(2) 具体的な取り組みについての事前説明

国際クラス担当 川上先生、能城先生、山下先生

- ① **個別時間割** 個人の学習習得度によって時間割を組む。学習進度を見ながら、毎学期調整する。
- ② **毎時終了時の振り返り表の記入** 毎時終了時にその授業を個人個人で振り返らせ、記録に残す。大人数で個別に対応する時間がなかった時でも一人一人の頑張りをほめることもできるという利点もある。
- ③ **個別教材** 本人の興味がある事柄について、教師がオリジナル教材を作成することが自主性につながる。それについてのテストも作成する。(80点以上がとれるように配慮する)
- ④ **母国語保持** 日本語での学習にとらわれず、その子の習得言語で学習させる。
- ⑤ **認められる経験** 上記のような取り組みをする、また親の都合でこのような状況のもと学習をしている、やりたくないという気持ちにも教師が向き合う。

(3) 参観授業

取り出し授業 (中高生) 国語 (山下先生) 生徒一人一人が必要な課題に取り組み、必要があれば先生がする。

日本語 (能代先生) 漢字、日本語能力テストの学習など本人が必要な学習をする。

取り出し授業 (小学生) 国語 (井手先生) 漢字の学習 一人一人のペースに合わせて、一日1個から3個。

国際英語 (小学生) ネイティブスピーカーによる完全英語の授業。

(4) 質疑応答 川上先生

① 英語以外にはどんな外国語に対処しているか？

→ドイツ語・フランス語・コリア語・中国語・スペイン語。

- ② 留学する際の提携の学校はどんな国にあるのか？
→アメリカ、中国、オーストラリア、アイルランド、カンボジア、ドイツといった国で語学研修をしたり、夏休みのワークキャンプや体験学習を行ったりしている。
- ③ 日本語クラスと国語のクラスのちがいは？
→日本語クラスは、日本語を初めて習う在日外国人子女、海外生活の長かった日本人子女、留学生のためのコース。
- ④ こういった取り組みをするのに特別な仕事をする教師がいるのか？
→担当教師が分担してやっている。
- ⑤ ICTの導入はしていないのか？
→やろうと試みているが遅れている。
- ⑥ 問題点はないか？
→取り出し授業の生徒たちは一斉型授業に慣れていない。

4 所 感

- (1) 訪問前にいただいた資料からも、先生方の一人一人の学習習熟度に向き合った指導やその方法が手にとってわかる学校であった。実際に訪問して説明を聞き、さらに母国語保持、先生方が生徒を認めるという事が、自分の考えていた以上にさらに生徒に寄り添ったものであることに、おどろいた。

母国語保持—その子の主要言語だけでなく、教科ごとに学習しやすい言語で学べる環境を整える。英語や中国語など日本でもよく聞かれるような外国語のみにとどまらず、本人が必要あればどんな言語でも先生方は何とかして準備をされる心づもりはあるようだということを感じた。多様な言語があるので、全てのものに対応するには現実的には無理を伴うようだったが、その姿勢には脱帽した。

認める—その子その子の学力を認めるだけにとどまらず、親の転勤などの都合でこのような状況下に置かれていることや、日々の学習の中で、気持ちが乗らなかったり、やる気が出なかったりする気持ちにも先生方が向き合っていることまで含まれる。認めるという指導が、学習内容だけに限られず、生徒や児童が置かれている状況や感情にも当てはめられていることに驚いた。一度それらを受け止めてあげることで、生徒児童の心からのやる気を引き出すことができると思う。そして、こういった取り組みや姿勢が、学園が打ち出しているグローバル宣言「グローバルには育てない、グローバルに育つのだ。」につながると考えると納得ができる。

事前の調査で、実際に学校へ通っている児童生徒や保護者の満足度がとても高かったこともあり、どんな取り組みをされているのか、そして子供たちの反応などにとっても関心があった。

授業参観では一人一人が個別に自分の課題に取り組んでいたところを短時間で見るにとどまったため、参観中に生徒たちの満足度を見ることは難しかった。ただ、今回のこの研修会に参加してくださった3人の先生方はこの学園の卒業生であり、自らの経験から認めるということを実から理解し、後輩の指導にあたりたいという事だけを考えても、児童生徒たちのこの学園への満足度が理解できたような気がした。児童生徒はもともと、学びたいと思っている。それに大人がきちんと手を差し伸べれば、きっと児童生徒たちは応えてくれる、そんなことを思わせる研修だった。

- (2) 学校として、教師として持つべき教育理念はとても理想的な考え方だとは思ったが、これをダラスの補習校で取り入れるには、時間の壁や指導者の数、教材など様々な問題があり、簡単には取り入れられない。取り出し授業とは違うが、小学部ほどの学年もクラスが複数であるので、単元によっては習熟度別にクラスを分けて行えば、一人一人とまでは行かなくても、少しは児童や生徒のレベルに寄り添った教育ができるかもしれないと考えた。

またダラスの補習校では、平日5日間の日本語の指導は保護者に頼るしかないという現実問題がある。保護者への対応として、定期的に保護者会を開くと言う事は話題に上がったが、保護者へはどんな協力を依頼すべきか、という点はもう少し質疑応答で出すべきだったと反省をした。

(文責：木下美香)

1 日 時 平成30年1月24日 13:30~16:30

2 訪問先 首都大学東京 南大沢キャンパス 東京都八王子市南大沢1-1

3 研修内容の概要

(1) 学校説明 首都大学東京 国際センター准教授 岡村郁子先生

東京都立の4大学が合併 今までにない大学を目指して新設2006年開学
年教養学部、都市環境学部、システムデザイン学部、健康福祉学部

目標 グローバルに活躍する人材の育成、首都ならではの問題解決をめざす

・多数の留学生受け入れ、日本人大学生の留学を応援する数多くのプログラム、奨学金あり

・ここ5年間で絵海外の協定大学も急増した。(留学しやすい)

・日本の各大学も留学生受け入れ、グローバル化を目指しているが、英語での開講が少な

いのが課題。首都大も生命科学コースのみ英語だけで履修可能

※国際副専攻 英語のみで受験可能（主専攻が必要）ならセンター入試不要
調査書と英語により小論文と面接 主専攻を取って海外への留学が必須

- (2) 質疑応答 岡村郁子先生 大学生5名（OA入試で入学） 補習校教員8名
男子3名（補習校経験者2名、高校で1年米留学、海外経験なし中高一貫）
女子2名（英、米補習校経験者1名、日本語を母語としない両親、日本生まれ）

[補習校教員が大学生に質問し、自由に答える座談会形式で実施]

生徒への質問は、将来の目標や、子供のころの家庭学の支援、勉強の仕方、漢字の勉強方法、保護者からの効果的な励ましの言葉、日本の社会や学生に足りないもの、中学校卒業まで残り少ない補習校の中3の生徒に向けたメッセージなど、教師、保護者両方の見地から大学生に様々な質問が続いた。

生徒たちは決して大人だからと遠慮したり、周囲に気を遣って意見を変えたりすることもなく、自らの経験や意見に自信を持って自分の言葉で話していた。まさにグローバルに活躍する人材に必要とされるコミュニケーション力や、言語力、探求心を持っていた。

海外での生活経験がない生徒もおり、必ずしも外国に行かなくても明確な目標があればOA入試で合格できるだけの英語力をつけることができることがわかった。また海外で育っているからこそ日本への思い入れがある生徒もいた。それぞれが将来の目標を持って、来年の留学先も決まっており充実した大学生活を送っている様子で、とても頼もしく思った。

【大学生からのコメント】

- ① 家庭での指導や効果があったと思われる指導、支援や態度について
- ・失敗してもよいからやってみなさい。背中を押してくれる。
 - ・低学年では学習は親の見えるところの方が効果的。
 - ・飽きたらさりげなく勉強に迎えるように仕向けてくれた。勉強の仕方を教えてくれた。
 - ・親に厳しく言われ、言われないうちに頑張った。
 - ・日本語力向上、実践的な日本語として絵日記を毎日、誕生日などは手紙を書かされた。
 - ・母の日本語学校について行ったり、母の通訳をしたりして漢字学習の必要性がわかった。

- ・問題集を取り寄せて勉強させられた。
- ・自分は日本人という考えが知らないうちに育っていたのか当たり前に日本の大学に入学

② 日本の社会や国、日本人について

- ・欠けているのは 目標持つこと、主体性を持つこと

以下3点は後で個人的に聞きました。

- ・心が狭い。異質なものを受け入れることが苦手 open mind ではない。
- ・積極性が足りない 自分から挙手して発言したり、人の意見に対してはっきりと自分の意見を述べたりすることができない。海外ではみんな発言する。
- ・個人ではなくいつも集団として行動している。

③ 補習校の生徒へ

- ・帰国生は日本の学生に比べて難しい熟語など漢字に弱いので、しっかり勉強しておいた方がよい。大学ではさらに専門用語が出てくる。ニュースなどで使われる日本語、熟語も勉強しよう。
- ・先を考えすぎると不安になるので一日一日小さな目標をひとつずつ達成していこう。
- ・父の国パキスタンに行ったとき 貧困を目にして、日本の子供たちには「あなた達の知らない世界がある。」と教えてあげたいと思った。あなたたちは守られているよ。がんばれ！
- ・2つの言語知っておいた方がいいよ。
- ・歴史の勉強は海外ではできないから自分で調べよう。
- ・「7つの習慣」を読んで夢をビジュアル化する。毎年やって比べる。やってよかった。
(中高一貫教育)
- ・日本のことをちゃんと知っておこう。日本人でも「外人」になってしまうのはダメだ。

(3) 学内案内 国際交流会館、図書館、学食等恵まれた自然環境と施設を見学

4 所 感

首都大学訪問を通して補習校の生徒への指導のヒントがいくつかあった。まず海外で生活する誰もが難しいと感じている漢字学習であるが、語彙や熟語の習得には、家庭の支援に加え、ニュースを視聴したり、絵日記や手紙を書いたりするなど実践的な活動が効果的であるようだ。グローバルな環境で活躍できる生徒の育成には英語や日本語といった語学力はもちろん、将来の明確な目標を持つことや、自分の考えを伝えることのできるコミュニケーション能力（語学、表現）の育成が必要である。

文責：石原意子

- 1 日 時 平成 30 年 1 月 25 日 10 時 00 分～12 時 00 分
- 2 訪問先 市川学園 市川中学校 市川高等学校（住所：千葉県市川市本北方 2-38-1）
- 3 研修内容の概要

(1) 学校説明 宮崎 章 校長先生

① 帰国生入試について

- ・ 1 年以上海外で生活し、小学 6 年生の間に帰国した子女が対象。
国語 100 点、算数 100 点、英語 200 点。英語のエッセイは、ネイティブの先生が採点
国語の学力は普通（漢字検定該当学年合格程度）でよい
数学はかなり高度な受験数学・英語は現地校でもよくできる程度が要求される
- ・ 英語選択入試あり。
- ・ 編入学；高校 1 年生の夏まで、7 月と 3 月に実施。
- ・ 編入は中学 3 年生ぐらいまでが理想。それ以降は現地校卒業後の帰国生入試が有利。

② 帰国生・編入生の入学後

- ・ 数学の学力不足の場合は、放課後に取り出し指導を受ける。
- ・ 2 クラスに分かれて一般受験の生徒と一緒に数学の授業を受ける。
- ・ 英語は取り出し授業でネイティブの先生による指導。
- ・ その他の教科は一般入試の生徒と一緒に授業を受け、補助プリントで対応する。
- ・ 中高一貫校のため、学習進度が速く、編入に合わせて進んだ学習が必要である。
- ・ アクティブラーニングの経験を生かして、グループのリーダーとして活躍する子も多い。

③ 在学中の留学について

- ・ 留学希望者；中学 3 年生を中心に 80 名⇒40 名での実施を予定
- ・ 文科省「トビタテ！留学 Japan」は、奨学金返済不要の奨学生 500 名募集
- ・ 留学後は現地で取得した単位を認定し、元の学年に戻る子が多い。

④ 授業外学習

- ・ 宿題は英語 1 ページ、数学 1 ページ程度
- ・ 普段は 2 時間程度、通学の時間も有効に使う子が多い。通塾は半数程度。
- ・ 7 時間の睡眠時間を確保することが大切である。

⑤ 土曜講座

- ・ 大学や企業から講師を招き、最先端の技術等についての講義を中高生向けに実施。
- ・ 年間 15 回程度、希望者のみの参加だが最低 1 講座をとることを奨励している。
- ・ 中学生の参加が多く、取れる限りの講座をとる子もいる。

(2) 校舎の見学

① アイリスルーム（ALICE⇒Active Learning for ICHIKAWA Creative Education）

- ・電子黒板機能付きプロジェクター及び大型ホワイトボード（3面）
- ・Wi-Fi環境（光回線）
- ・ノートPC生徒用43台（キーボード脱着式タブレットPC）
- ・アクティブラーニング専用ファニチャーの整備
- ・プレゼン動画撮影用360°カメラ

② 図書館

- ・蔵書は約12万冊。毎年2000～2500冊の書籍が新たに寄贈・購入されている。
- ・英語の本も多く、語数が明記されていて選びやすくなっている。
- ・多読を進めているが高校生になると読書量が減ってしまうのが課題である。

③ 質疑応答

① SSH（Super Science High School）

- ・高校2年生で文理選択し、理系の生徒には週2時間配時されている。
- ・5,6時間目なので、企業（花王他）や大学へ出向いて、協力を得たりすることもしやすい。
- ・200名の生徒に20名の理科と数学の教員がつく。
- ・各コンクールに参加し、外部の評価も受ける。⇒適正な評価、AO入試での活用。

4 所感

- (1) 帰国生は様々な困難に立ち向かって頭を使った経験から、将来役立つ考え方やスキルが身につけている。帰国後、遅れている教科も3年程度で追いつけばよい。すぐに一般の生徒と同じにというのは無理であるし、また、そうである必要もない——というお話を伺い、漢字や語彙の定着に遅れのある児童も、補習校ではその子なりの伸びを保証してやるのが大切だと改めて感じた。
- (2) 帰国後の進路は、国語力をはじめ、学力によって様々であることがわかった。子どもの学齢や学力に応じて、適切な進路選択ができるようアドバイスできるように、担任としても、学校としても情報を準備しておきたい。
- (3) 小学生のうちには、本をたくさん読むよう支援していきたい。また、平易な新聞記事や適切な内容の説明文などを読む機会を与えていきたい。中学生以上には、読書と新聞をよく読むことを勧めたい。
- (4) 英語力や現地校の成績も大切なので、現地校での学びも支えていきたい。

（文責：長本 玲子）

東京学芸大学附属国際中等教育学校

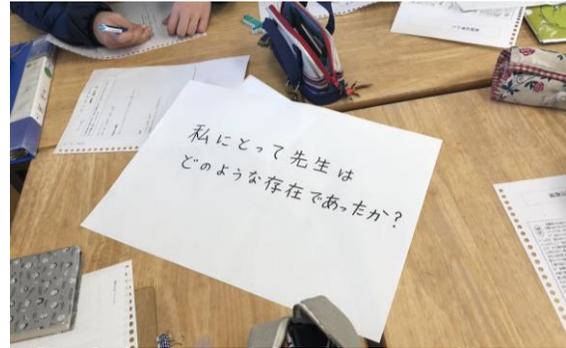


学校紹介と質問の様子

国際的な教育プログラムである国際バカロレアの指定校として、最先端の教育プログラムについてお話を聞く事が出来た。



世界史 5年生 グループプレゼンテーション
ナレーター役、教授役、経済学者役などテレビ番組のような討論形式で行っていた。



国語 5年生 グループディスカッションの様子

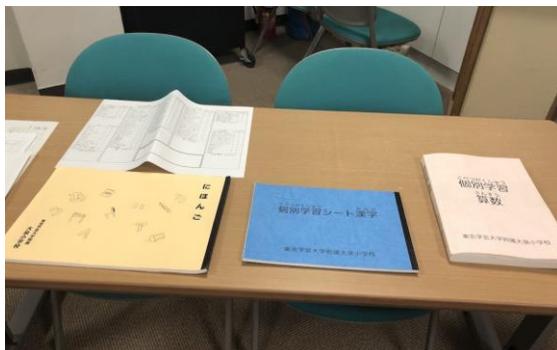
夏目漱石の「こころ」を題材に、個人で考えた課題をもとに、似ている課題の生徒ごとにグループを作り、活発な議論を行っていた。



SSH 研究課題

スーパーサイエンスハイスクール(SSH)として、個人又はグループで行う研究ポスターが廊下に貼られていた。大学で行うようなとても高いレベル内容であった。

東京学芸大学附属大泉小学校



個別学習のための開発教材

一人一人の進度に合わせ個別指導計画を作成。個別学習の時間では、独自で開発した教材などを取り入れ、足りない部分の補充していた。

曜日	月	火	水	木	金
学年	3	3	3	3	生活科
1	国語	国語	国語	国語	体育
2	国語	音楽	音楽	音楽	国語
中休み					
3	漢字	算数	算数	漢字	国語
4	日本語	算数	算数	算数	国語
昼食					
屋休					
清掃					
退校					

時間割 4年生 ゆり組

児童への配慮から、一部の授業は教科担任制を設けていた。



社会科 4年生 ゆり組 体験方式の授業の様子
 「水の使い方や使う量について調べよう。」という単元で、実際に水を飲んで、水道水か市販されている水かを当てるクイズを行っていた。子供達が発言をしたくなるような発問がなされていたり、わからない言葉はその場その場で説明をしていたりしていた。板書では、漢字にルビを振っていた。

啓明学園初等学校・中学高等学校

国際学級生徒時間割

一人一人の進度に合わせ個別時間割表が作成されていた。得意な教科は一般学級に混じって勉強する生徒もいるとのことであった。



JSL クラスの多読教材

生徒の興味を引きつける教材として、漫画本なども取り入れていた。バスケットが好きな生徒のために、スラムダンクがおかれていた。



独自で開発した教材

大量の開発教材がストックされており、生徒一人一人の進度にあった教材が使われていた。教材には全てルビが振ってあった。



JSL クラスの独自開発教材かるた

生徒と一緒に啓明学園にまつわるかるたを作成していた。これを使って今後、他学年との交流をはかるとのことであった。

首都大学東京南大沢キャンパス



学校紹介と生徒の対談の様子

国際副専攻をとっている生徒5人に話を聞く事ができた。海外滞在中での苦勞されたこと、親からの勉強に関する支援状況などを聞かせてもらう事ができた。又在学中に留学ができるという事で、留学先とその理由を聞く事ができた。それぞれが強みの英語を生かした高い目標を持っていたことに感心した。



図書館の様子

新しく広いキャンパスの中でも特に図書館はモダンで落ち着いて勉強ができる空間が広がっており、多くの学生が勉強をしていた。

市川学園



学校紹介と質問の様子

帰国子女の生徒を採用するにあたり、日本語よりも現地校での語学習得が特に重要であるとお話を伺った。



ICT ルーム

メディア機器の使用やグループディスカッションなどに使われる教室。タブレットなどを各生徒に持たせ授業を行うこともあるとのことだった。



図書館にある洋書コーナー

大量の洋書が置いてあり、絵本レベルから一般書や専門書まで幅広い本が並んでいた。各本にはワード数が示されていた。



帰国生徒との対談

香港に6年間滞在中、中学1年生の時に市川学園に入学したという受験生からは、最も苦勞したことは漢字で、今でもセンター用問題集を使って勉強をしているという話を聞いた。

(文責：五味愛)

おわりに

「百聞は一見にしかず」（人から何度も聞くより、一度実際に自分の目で見ることが確かである、よくわかる）を、まさに実感できた日本研修であった。この思いは、間違いなくすべての参加教員が感じたことであろう。

このことわざには続きがある。「百見は一考にしかず」（見るだけでなく、考えないと意味がない）「百考は一行にしかず」（考えるだけでなく、行動すべきである）「百行は一果にしかず」（行動をするだけでなく、成果をあげなければならない）

ダラス補習授業校がまさに変革を遂げようとしている今、「子どもたちのためになる指導」の実現を目指し、この日本研修は大きな意味をもった。

1 研修を通しての成果

(1) 子どもに寄り添う

日本語が困難な子どもたちへの具体的な手立てを考えることはもちろんのことだが、その前に、まずは「子どもに寄りそう」ことの重要性を学んだ。

大人から見て日本語に課題がある子どもたちは、そのことに子どもたち自身が一番よく気づいている。「気づいている」というよりは、「気づかざるを得ない場面を幾度となく経験している」といった方が正確であろう。補習校ではテストの点数が思うように取れない、ワークシート課題に一人で取り組めない、先生の質問に自信を持って挙手をして答えることができない、宿題が自分一人でできない等、誰に言われなくても、日本語が困難なために辛い思いを何度もしているはずである。この場合、子どもたちの自尊感情は極めて低いと思われる。「自分はできない」と思い込んでいるからだ。そういった子どもたちをよく見て、とことん付き合う。その子どもの母語を支えて（「分からなかったら、英語で考えてもいいよ。」の声かけ等）、その子ども自身を受け入れる。その結果、本人の内部から「日本語をやろう！」と意欲を引き出すことができれば、先生から「教えられる」のではなく、「自ら学び」の姿勢が生まれる。

(2) 子ども主体の学習

まずは、「教え方」の前に、子どもが興味を持ちやすい教材を選ぶことが大切であることを、複数校の先生方から伺った。興味のある教材を提示されれば、子どもたちは「知りたい」「学びたい」と、自分たちから積極的に学習に取り組めるからだ。そのためには、教師はその子ども、または指導学級がどういったことに興味があるかを見極め、それに適した教材を用意する必要がある。教師自身もニュースや時代の流れに気を配り、どんなことがその時々で話題になっているか、把握しておくことが大切だ。

次に、教師の「問い」の立て方が非常に大切であることも分かった。発問は、すぐに答えがでる内容ではなく、子どもたちの探究心をくすぐり、子どもたち自らが「興味をもって、それをとことん調べて理解しよう」とする姿勢を導き出すものであることが理想である。そうすることで、おのずと「深く考える」ことが実現され、主体的で深い学びへと繋がっていく。教師同士で「問い」の立て方を相談することも有効である。

(3) 思考したことを文章へ

「分かる人？」と挙手発言をさせたり、教師が指名発言させたりするだけでなく、発問の答えをまずは自分のノートへ書かせるようにすると、どの子どもにも「主体的に学んでいる」瞬間（しっかりと考える）が生まれる。この時に、日本語が困難な子どもへは机間指導をし、「～分かる？」と支援をしていく。またそうでない子どもにも「～がいいね。」等、言葉や表現についてコメントをし「出来ていることへの喜び」を実感させる。学級全体で自分の考えを発表させる時には、子どもたちの言葉を拾って、板書をしていき、表現が正しくないところを皆に説明したり、「もう少し詳しく言ってみて。」と別の表現でも発表させたりする。このように友達の意見も知りながら、正しい内容、表現の理解へ導いていくことで、学級全体の語彙や文章力を高めていくことが可能になる。

「書く」ためには日本語で考えるので、その時に「思考力」が強化される。

(4) 日本語力の向上

「多読」を推奨している学校が複数あった。「ドリルを一冊して問題を解くよりも、たくさん本を読むほうが、効果がある。」とのご意見も伺い、漫画から始まり、多岐に渡る文章を読むことの重要性に改めて気づかされた。

2 ダラス補習校において考えられる今後への展開

今回の学校訪問を通し、未来の「グローバル人材」として、帰国生への期待度がかなり高いことが分かった。国内のみで学習している子どもたちと比べて、「しっかりと考えることができる」（現地校でも鍛えられている）、「自分の意見がしっかりとと言える」（積極性があり、自分の意見を発表することに慣れている）、「リーダーシップ性に優れている」（主体的に動ける）等を評価されていた。

今後、これらの資質を備えた子どもたちを育成するにあたり、授業数 42 週の補習校では何がどこまでできるのかを以下の観点から改めて考えていきたい。

(1) 子どもたちが興味をもって学習に取り組み、一人一人の目標に応じて基礎・基本が定着できるように、授業づくりを工夫・改善する。(基礎力)

- (2)デジタル教科書も有効活用しながら、可能な限り生徒主体の授業（討論やグループワークなどのアクティブラーニング）となるよう授業改善を行う。（思考力・実践力）
- (3)知識の習得と子どもたちが主体的に学ぶ授業をバランスよく取り入れ、現行の指導法と評価法の工夫・改善を行う。→補習校の限られた授業数を最大限に活用
- ※21世紀型能力＝「基礎力」＋「思考力」＋「実践力」

おわりになりましたが、この度の「AG5ダラス補習授業校教員日本研修」の機会を与えてくださったAG5関係者の皆様、研修すべての日程を調整して下さった佐々先生を始めとするチーム4の皆様、研修前の準備段階から研修終了までたいへんにお世話になりました。さらには、訪問先の理事長様、校長先生をはじめとする諸先生方には大寒波の中で温かく迎えていただきました。この研修での成果を教職員一同で分かち合い、「子どもたちのためになる指導」の実現へ向けて、今後とも学校一丸となって指導の一層の充実を目指して努力して参ります。この度は本当にありがとうございました。

文責：佐藤 恵美